

学習者の英文法・教師の英文法

林 龍次郎

1. はじめに

本稿は、学習英文法のよりよい指導法を模索している、または文法・語法の最新の研究に関心のある英語教員の方々に対して、考えるヒントを提供することを目的とするものである。

2節では、中高生・さらに大学生まで含めた英語学習者に対していかに英文法の意識を高めさせるかを考える。文法参考書の第1ページから順番に勉強していくことも大切だが、文法を大きくことばのしくみとして捉え、それを明確に意識させて関心を持たせるという方向も必要である。そのために有用な題材として文のあいまい性を取り上げる。

3節では、英語教員側の文法・語法理解について考える。英語教員が知っているつもりの文法知識の中には必ずしもそのままで通用しない場合がある。そのようなことの例を紹介したいと思う。

2. あいまいな文と英語学習者

文法(=ことばのしくみ)に対する意識を喚起する方法の1つとして、ここでは文のあいまい性(ambiguity)を取り上げて考察する。あいまい性とは、同じ語句あるいは文が2通りの意味にとれることである。そして意味の違いはしばしば言語構造上の違いと対応する。

あいまい文は英文法や英語学の基本文献に当たれば典型的な例がすぐに見つかる。それらをいくつかの種類に分けて以下に提示してみよう。

1. 語彙的なあいまい性

- (1) They went to the bank.
 - (2) There's no school anymore.
- ### 2. 2通りの構成素構造によるあいまい性
- (3) He is kind to old men and women.
 - (4) Tom hit the man with a stick.
 - (5) She answered the question precisely at noon.

3. 前項より“深い”レベルにおけるあいまい性

- (6) I love you more than Kim.

(7) Flying planes can be dangerous.

(8) The lamb is ready to eat.

4. 否定等の解釈に関するあいまい性

(9) We didn't talk until midnight.

(10) They predicted no rain.

(11) Bill would be happy with no job.

以上の分類は西山(2011)を参考に、本稿での説明のために考案したものである。あいまい文についてのより詳しい議論は西山論文をご参照いただきたい。

さて、これらの中には日本人学習者にとってそのあいまい性が理解しやすいものと理解しにくいものがあると思われる。これは、母語である日本語の事情と切り離して考えることができない。

まず、1の語彙的なあいまい性とは、単語レベルでのあいまい性すなわち同音異義語および多義語であり、日本語においても同様のことを見つけることが容易である。(1)の同音異義語 bank の日本語における類例としては「雲」と「蜘蛛」など生徒ですぐに指摘できる。(2)の多義語は、この school という例にそのまま対応する「学校」に全く同様の多義性(「施設あるいは建物としての学校」と「学校で行われる活動」)があるのでわかりやすい。

2のような樹形図で表せるあいまい性も、日本語の直訳が同様にあいまいになる場合があり、日本語を通しての説明が比較的容易なので学習者には理解しやすい。(3)の old men and women の日本語訳「年をとった男性と女性」は完全に英語と対応したあいまい性を持つ。(4)について「彼は杖を持った男を叩いた」と「彼は杖を持って男を叩いた」は日本語では同一ではないが、ほぼ対応している。(5)は、「12時に正確に問題に答えた」と「ちょうど12時に問題に答えた」のように、語順及び訳語を少し工夫する必要はあるが、対応を十分に示すことができる。

3のタイプのあいまい性は、2と異なり、表面的な構造の樹形図だけで示すことはできない。(6)に関しては、日本語の「私はキムよりあなたを愛してい

る」も英語と同様のあいまい性があるため学習者にはそれほど難しくないのである。しかし(7)(8)は大学生でも正しく捉えられる者は多くない。(7)は言語学ではよく知られた例であり、flying planes という句において主要部(head)が flying か planes かという問題である。学校文法でもこれは flying が現在分詞か動名詞か、という教師になじみ深い事柄なのだが、このような区別が日本語にはないためか、意外に学習者には難しいようだ。(8)となるとさらに難しい。これは、the lamb が to eat の意味上の主語にも目的語にもなりうるという問題であるが、表面的ではない深い構造に言及しなければ説明できないものである。

4のタイプの、特に否定語に関するあいまい性になると、学習者にとっての難度はかなり高くなる。ここでの問題は否定の作用域と呼ばれるものであり、統語構造に反映される場合もあるが、構造より意味論上の問題と考えられる場合もある。

(9)は、until midnight が否定の影響を受ける(否定の作用域内にある)解釈と受けない解釈があり、Until midnight we didn't talk. に変えれば後者の意味のみになる。(9)に対応する日本語の「私たちは夜中まで話をしなかった」もあいまい文であると思われるが、あいまいでなくする方法が英語のように明確には示せない。(10)は no が文否定で They didn't predict any rain. と同義になる場合と、no rain が構成素否定で They predicted that there would be no rain. と同義になる場合とがある。(11)も同様で、文否定の場合は Bill would not be happy with any job. と同義であり、構成素否定の場合は With no job, Bill would be happy. と同義である。no を not ... any に置き換えるような手段は日本語にはない。

以上に述べてきたとおり、あいまい文の中で日本人学習者に理解しやすいのは、日本語訳も英語と対応するあいまい文となるもの、あるいは英語でも日本語の場合と近い説明ができるものである。それらに当てはまらないものは難しい場合が多い。上の例で1→4に進むにしたがって難しくなる。そのことは筆者が時々大学生に対して行っているテストによっても示されている。

このことが何を示唆するかについては、いろいろな見解があると思われる。英語学や英語教育関係者の間では、日本語を通しての説明ができない部分を

どう教えるか、という部分に関心が集まるかもしれない。それは確かに大事なことであるが、本稿では、日本語との比較を通して理解しやすい部分があるという事実を肯定的に捉えることを提唱したい。実際に日本語を通しての説明がわかりやすいのであれば、それを積極的に利用すればよいのではないだろうか。学習者が英語と日本語に似た部分があることを認識すれば、それは言語というものへの関心につながる。一般にはどちらかといえば言語間の違いが強調されることが多いが、一見大きく違う言語の間に共通の性質があることを意識することは非常に重要であると考える。今一度、日本語が英語学習の中で果たす役割について考えてみてはどうだろうか。

以上のことを通して、文法を単なる細かい事項の暗記のように捉えるのではなく、各学習者が発見していくことばのしくみと捉える、という視点を教育の場に導入することを考えていくのが望ましい。

3. 英語教師自身の知識を見直す

この節では、英語教師がわかったつもりでいる文法・語法について、意外に気がついていない事実があることを、2つの例を挙げて述べたい。

読者の方々は I'm not very impressed. という文をどのような意味と捉えるであろうか。おそらく多数の英語教師の方々はこの文を「私はあまり感銘を受けなかった」という意味ととり、そのように教えておられるのではないか。しかし、代表的な学習英英辞典 *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (OALD)は、これを I'm not at all impressed. と言い換えているのである。もう1つの定評ある英英辞典 *Longman Dictionary of Contemporary English* (LDOCE)も同様である。また、代表的な英語語法書である Swan (2005)は、not very を「非常に低い程度(quite a low degree)」を表すとしており、That meal wasn't very expensive. を quite cheap で言い換えている。これは「全然高価ではない」の意味である。

日本で出版されている英和辞典等は、not very の意味として「全く…ない」を載せているものもあるが、第一義的にはこれを「あまり…ない」の部分否定としていることが多い。しかし OALD や Swan は「全く…ない」に当たる意味しか載せていないのである。これはどう考えたらよいのだろうか。

Swan よりも新しい文法書 Carter et al. (2011) の CD-ROM には次のような説明がある。

Not very は否定的発言を和らげる言い方で, Ray is usually not very punctual. は, より直接的に言うとき Ray is always late. であり, This pasta isn't very nice, is it? はより直接的に言うとき This pasta is not nice. である。

以上の辞書や文法書の記述を総合すると, not very は否定を弱めるものなので「あまり…ない」に相当するのだが, 実際は「全く…ない」という意味を婉曲的に表現したものである, ということがいえるのではないか. 文脈によって意味は変わるので, おそらく「あまり…ない」に相当することもあるだろうと思われ, 実際 *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners* (MED), *Longman Dictionary of English Language & Culture* などの辞書は not at all に加えて only slightly, to a small degree の意味をあげている. しかし全般的に見て, not very の真意は「全く…ない」である場合が優勢であるように思われる. このようなことは, 日本語でも何かを依頼されたとき「ちょっと難しいです」というのがほぼ「全くできない」を意味するのと同様と考えるとわかりやすい(ここでも日本語を通しての考察が役に立つ).

2つ目の例は, 助動詞 can の用法の1つである. Carter et al. (2011)の挙げる① Reducing cholesterol through diet can be difficult. や② Fireworks can frighten pets. という文を読者はどのような意味にとるだろうか. おそらく多くの方が「食事でコレステロールを減らすことは難しいことがある」「花火はペットを怯えさせることがある」のように解するだろう. つまり sometimes の意味が can に含まれるという解釈である.

ところが Carter et al. による①の説明は It's not always difficult for everyone, but in general it is difficult. である. 同書はこの can を general truth を表すものとし, 常に (always) ではないがたいてい (usually) 真である物事について用いると述べている. これは「難しいことがある」とは異なり, 「ほとんどの場合に難しい」の意味だと言っていることになる. OALD ではこの can の語義は used to say what sb/sth is often like となっており, Swan (2005) は, common or typical なことについ

て用いると説明している(ただし He can be very tactful sometimes. (OALD)のように sometimes を伴う用例も挙げられている). この2書によると Carter et al. の説明よりは頻度が低いが sometimes より高いことになる. 一方, LDOCE, MED においてはこの can は sometimes という語を用いて記述されており, 「…ことがある」に近いといえる.

以上のように, いずれにしても一般論を述べる時の言い方であるとはいえるが, この can の表す現象の頻度は辞書や文法書により usually (generally), often, sometimes と異なっており, 1つに決めることは難しいように思われる. 使用実態については今後深い調査が必要であるが, 我々英語教員はこのような場合に従来の知識に依存して, 「…であることがある」以外の意味にとるのは誤り, などとすることのないよう注意したい.

4. おわりに

以上, 本稿では生徒にことばのしくみを考えさせるためのヒントと, 英語教員があまり疑わずに信じている文法事項が実は一筋縄ではいかないことを, 例を挙げて示した. ご指導の参考になれば幸いです.

参考文献

- Carter, Ronald, et al. 2011. *English Grammar Today*, Cambridge University Press.
Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition, 2009. Pearson Longman.
Longman Dictionary of English Language & Culture, 2005. Pearson Longman.
Macmillan English Dictionary for Advanced Learners, 2007. Macmillan.
 西山佑司(2011)「曖昧表現からことばの科学を垣間見る」大津由紀雄(編)『ことばワークショップ—言語を再発見する—』pp. 135-180. 開拓社.
Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th Edition, 2010. Oxford University Press.
 Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage* 3rd edition, Oxford University Press.